

## 鎌倉市にふさわしい博物館の基本的なイメージについて

### 1 鎌倉市にふさわしい博物館基本構想

#### (1) 「歴史遺産と共生するまちづくり」の施策として

歴史的遺産を活用した博物館活動／文化財の適切な保存管理機能の充実／歴史的遺産と共生するまちづくりの推進

#### (2) 目指す姿

総合博物館の構築／資料の収蔵区分の見直し／エコミュージアムの構築

#### (3) 基本構想の課題

ア 近年の「博物館の定義」「役割」の視点／文化のハブ・教育のハブ・地域課題の解決

イ 「エコミュージアム」理念と現実の乖離

▶ エコミュージアムの理念を取り入れつつも、鎌倉にふさわしい博物館のあり方を模索する

### 2 「エコミュージアム」の再検討

#### (1) 行政主導型を基本とした住民参画：持続可能な運営組織を目指す

#### (2) 市域全体を学びの場に：子どもたちの学びの場、大人たちの好奇心を育む場

#### (3) デジタル化の推進：市域を博物館とみたてるデジタルミュージアム

▶ 「エコミュージアム」の古く、現実と乖離したイメージから、具体的な鎌倉にふさわしい博物館のイメージへ。新たな名づけが必要

### 3 KAMAKURA MUSEUM カマクラミュージアム 構想

鎌倉国宝館×鎌倉歴史文化交流館＋フィールドミュージアム＋デジタルミュージアム

▶ 将来的には人文系の総合博物館へ

#### (1) 「鎌倉市にふさわしい博物館」の具体像 ① 交流館・国宝館の組織と機能の強化

##### ア 設備の拡充

収蔵設備等の拡充／100周年・10周年に向けたリニューアル／展示設備の整備／埋蔵文化財センター設置の検討

##### イ 展示の充実

展示環境の改善／展示予算の強化／展示のための調査研究の強化

##### ウ 調査研究機能の強化と調査研究費の確保

科学研究費助成金等の取得（事務組織も条件）／調査研究費の予算化／紀要及び年報の刊行

##### エ 独自の運営資金の確保

寄附の受け入れ体制の強化／ふるさと納税やクラウドファンディングの活用／スポンサー協賛

##### オ 学芸員の人材強化と確保

安定的な学芸員の確保と館の特性を踏まえた学芸員の配置／事務職の安定的な確保

##### カ 防災の取り組み：市域全体の文化財の防災拠点として

災害対応のノウハウの蓄積（有事の対応者の配置）／県内外の博物館との連携／災害発生時の想定マニュアルの作成

##### キ 発信力の強化

デザイン性のあるHPの充実／デジタルアーカイブの公開／駅ポスター掲出場所の増加／SNSの強化

##### ク その他

文化財修理事業の拡充／館名の検討／収蔵区分の体系化／中央図書館との連携強化

## (2)「鎌倉市にふさわしい博物館」の具体像 ② カマクラミュージアム構想の推進

### ア 市域全体を博物館とみてる博物館の目的

子どもたちの「新たな学びの場」の創出／デジタル化の推進

▶鎌倉国宝館＋デジタルミュージアム 鎌倉歴史文化交流館＋フィールドミュージアム

### イ デジタルミュージアム（拠点：国宝館）

鎌倉国宝館の収蔵品（寄託品・館蔵品）、館史資料のアーカイブ化

収蔵品と資料＋埋蔵文化財関係資料のデータベース公開

▶デジタル化の目的：6,000点を超える収蔵品の日常管理を容易に／将来に向けて引継ぎ可能な形へ／鎌倉の文化財の可視化／誰もがアクセスしやすいデータベースへ

### ウ フィールドミュージアム（拠点：交流館）

フィールドを活用した子供の学びの場の創出／歴史・文化の学びに基づく鎌倉歩きの拠点整備／周遊を意識した交流館常設展の一部展示リニューアル／フィールドを前提としたデータベースの蓄積

▶地域の人たちと掘り起こし／鎌倉地域全体を教育資源とした学校・博物館・フィールドの連携

▶フィールドワークの目的：地域の網羅的な文化財現地調査（持続可能な保存）／作業的・体験的な学習活動の重視  
地域への愛着を育む

#### (ア) 事前準備 学芸員

構成遺産カルテのフォーマット作成：石造物／地名／屋号／寺社／文書／建築など

基本地図の準備／構成遺産のリスト化／カルテへの基礎情報入力

#### (イ) ワーキンググループの立ち上げ

アクションプランの検討

構成：博物館職員、教育委員会の先生、図書館、文化財課学芸員、市内学校の先生、有識者、デザイナー、市内博物館の学芸員、高校生・大学生（フィールドワークグループのリーダー）

#### (ウ) フィールドワークグループ立ち上げ：地域ごと

現地調査の実施：現地の写真撮影／位置情報の追加／聞き取り調査

▶最初にモデル地区の設定（EX 扇ガ谷）

高校・大学生リーダー／地域の有志者／学校連携でのフィールドワーク

地域の小中学校もフィールドワークに参加

#### (エ) 公開へ向けた作業

地図データへの落とし込み→データベースの公開／モデルコースと解説文、配布マップの作製

#### (オ) 成果の活用

- ・データベースの公開

- ・解説文やマップの配布

- ・イベントの実施

- ・フィールドワークグループによるガイド等のイベント

- ・学校への出張授業

- ・リスト及びマップに基づく定期的な現状確認

- ・修学旅行や郷土学習などの事前資料としての活用